仙人通信 181　丁須の頭(1057m)

　丁須の頭は裏妙義を代表する山で、妙義湖の北に金槌状(Ｔ字状)の岩峰を持つ事で知られた山である。

　妙義湖の奥にある閉館中の国民宿舎裏妙義の駐車場に車を止め、義務化されている登山計画書をポストに入れ、木戸・籠沢を詰めて山頂を往復する事にした。

駐車場の入口にある妙義湖へ注ぐ中木川に沿って５分程林道を進むと、３m程の土手の上に山頂を示す道標があり、杉林の中の登山道のスタートだ。

杉の丸太で整備された階段は、登山路への安心感を与えてくれる。足元では花の終わったカラマツソウが緑の葉を元気に伸ばしている。10 分程で先程の中木川から別れた籠沢を渡り沢の左側のコースとなる。瀬音以外は、カケスとヒヨドリの鳴き声だけで静かなものだ。更に 10 分程で籠沢を対岸に渡り進む。コースは沢沿いの杉林の中ではあるも、露岩が目立つ。岩自体は不安定な状態ではなく、よく乾燥しており滑るような事はないも、手でのホールドは欠かせない。大きな岩には鎖が準備されており、ピンクのテープが小枝に捲かれ、岩には黄色のマークも付けられており、これらの目標物を確認して進む。しかし、先月の台風の影響と登山者も少ない事が相まって落ち葉が多く堆積し、踏み跡が見つからず、常に落葉を掻き分け、コースを読みながら進む。20 分程で杉林を抜け出し、ニレ・コナラ・サクラ等の落葉樹の林となり、木の幹に『木戸』と書かれた板を見つける。この先で左手の烏帽子沢と別れ、急勾配な沢の中心部のコースとなる。幸いにも水が涸れており、落ち葉があるも滑る事は無いも両側の岩壁が迫っており、地震が発生したらと不安を感じる。

こんな時、岩の上に元気に白い花を付けたヤマジノギクに迎えら、登る勇気を貰えた。

２本程の鎖を過ぎると、ガイドには黒滝とあるも、水が涸れており、確認出来ず残念・・。

やがて両側の岩壁が迫りチムニー状となり、その上に青空も見えた。ここには 10m程の鎖が２本あり、３点ホールを確実にして慎重に詰めると、70 分程で御岳からの尾根の分岐である。赤く紅葉したモミジを眼下に見ながら、鎖を握り反時計廻りに山頂を目指す。

15 分でＴ字状の岩の下部の山頂に到着だ。伊勢崎の先には鳴神山等の栃木の山脈が、妙義山の先には赤久縄山や秩父の山脈が、更に直ぐ判る荒船等の山脈が、隣の赤岩の先には堂々とした浅間山が、更に上越国境と 360°展望は最高である。手の先には赤い実を付けたナナカマドや赤く紅葉したドウダンツツジが迎えてくれ、山頂を極められた達成感に満された。

妙義地区は６００万年前の陸上火山で、硬い輝石安山岩と凝灰角礫岩から構成された屏風状の断崖絶壁や異形の山頂を持つ事を、体全体で感じ得た４時間強（1700０歩）の山旅となりました。（H30.11．2）

沢の中のコース　　山頂のＴ字状の岩　　手前が妙義山の山脈